



# やかただより

広川町  
全戸配布

第111号  
令和2年1月

新年おめでとう  
ございます

令和という新しい元号になって初めてのお正月を迎えました。皆様お健やかに新年をお迎えのことと存じます。旧年中は、「稲むらの火の館」に対してご支援を賜りありがとうございました。



昨年10月号でもお知らせいたしましたが、本年2020年は「濱口梧陵翁生誕200年」となります。今、あらためて梧陵翁の偉業を思い浮かべてみますと、やはり安政津波から広村を守ったということが一番でしょうか。まず、地震の後、避難を呼びかけたことによって多くの人の命を助けたということが現代社会へも影響を及ぼしています。2004年のスマトラ沖地震・インド洋津波、2011年の東日本大震災で津波災害の重大性を目の当たりにしました。それが「津波防災の日」「世界津波の日」の制定につながりました。「稲むらの火」の物語と共に、広川町の「津浪祭」「稲むらの火祭り」も津波防災を伝承する手段として国内はもとより、世界から注目されています。普段から慣れ親しんだ私たちにとってはあまり重要視していませんが、他から見学に来られた人々にとっては、町内の防災風景と共に感心されています。私たちは、そのことを誇りとして、防災の意識を高めようではありませんか。

「梧陵翁生誕200年」の今年を機会にあらためて、自分自身や家族の防災を見つめなおしてみましょう。自分自身、家族の命を守るために。これは、津波だけの話ではありません。台風や豪雨などにも応用できることです。

梧陵さんの活躍は、広川町では「広村稽古場・耐久社」の教育振興にかけた熱意があります。他には、江戸・関東では蘭学医を支援した医学への貢献があり、現在の時代へも大きな影響を及ぼしていることも皆様に知って欲しいことです。

梧陵さんの活躍は、広川町では「広村稽古場・耐久社」の教育振興にかけた熱意があります。他には、江戸・関東では蘭学医を支援した医学への貢献があり、現在の時代へも大きな影響を及ぼしていることも皆様に知って欲しいことです。

「第13回稲むらの火講座」開催 !!

第13回「稲むらの火講座」を開催いたします。今回の講師は、神戸大学地域連携推進室学術研究員、大阪府立大学客員研究員をされています山地久美子先生です。講師をご紹介します。



神戸大学地域連携推進室学術研究員。大阪府立大学客員研究員をされています。ハワイ大学卒業、神戸大学大学院修士課程修了。神戸学院大学客員教授等を歴任されました。

2009年より日本・韓国・台湾・米国・ニュージーランドにて災害調査を進め、被災地で復興カフェ・音楽カフェ、国際シンポジウム、ワークショップを主宰しています。

2016年からは淡路島の野島断層保存館や東日本大震災、熊本地震被災地の皆さんとともに「全国被災地語り部シンポジウム」を開催し、兵庫県と全国被災地のネットワークをつなげる活動を展開されています。このシンポジウムへは、「稲むらの火の館」「広川町語り部サークル」もお招きをいただき、参加させていただいています。

今回の講演会は、

日時 令和2年3月8日午後1時30分～3時  
場所 稲むらの火の館3階  
演題 「全国被災地語り部シンポジウムの取組みから考える防災・減災」

参加定員 90名

申し込みは、稲むらの火の館へお願いします。

電話 0737-64-1760

FAX 0737-64-1761

定員をオーバーした場合は、申込順とさせていただきますので、ご了承ください。

尚、お問合せも上記の電話へお願いします。



## こども悟陵ガイドの本番を迎えました！

こんにちは！ 「こども悟陵ガイドプロジェクトチーム」の関西大学近藤ゼミ、龍谷大学石原ゼミです！ 私たちは11月16日、17日の2日間にわたり、7月から準備を進めてきた「こども悟陵ガイド」を実施



しました。広川町の「稲むらの火の館」にて広小学校の6年生が、保護者の皆さんや観光客の方々



などたくさんの来館者の前で、クイズ形式によるガイドをおこないました。

「1日館長」ということで、各グループ1人ずつ大学生が作成したオリジナルの法被を着て臨み

ました（上掲写真を参照のこと）。

最初は緊張している一面も見られましたが、大学生や先生方のアドバイスもあり、回数を重ねるごとに慣れてきて積極的に来館者の方に声を掛けてクイズを出題していました。また、来館者の中には海外から来てくれた方もいて、小学生が「稲むらの火」の歌を英語バージョンで披露し、大きな拍手をいただく場面もありました。児童は来館者の方の質問にスムーズに答えていて、今までの活動の成果を存分に発揮できているようで、とても頼もしく感じました！

2日間、小学生の頑張りをサポートさせていただき、私たち大学生も貴重な体験となりました。6年生の皆さん2日間、お疲れさまでした！



さて、帰ることができない者は、無理にも家へ入らず酒飲みは広の村中にはない。

西の酒屋は津波によって桶が浮き上がり、蔵ともに流亡した。のちに大桶倒れた儘、今もそのままである。湊の辻の酒屋は残ったが、店の中が混雑して中々売ることもできなかった。その他の商家もみな同じようなものであった。しかし私の商売が止まったのはともかく、毎日必要である味噌・酢・豆腐・醤油などの不自由には大変困った。その困難はいまも思い出し、無益な贅沢をしていない。今後、これほどの災害はないようにと、日々の安寧を願って居たが、実に水が流れるように日経ち、大晦日となった。そこで地震がおこること8、9度、最も大きく、津波もあり毎日地震があったが、とくべつであると(大晦日の行事を?)仕度した。人々は恐怖で家財道具を携え逃げる者もあり、我が家も老母がまた明王院へ隠居した。しかし何事もなく年が明けて、安政二年元日はなにもなく、大地震もなくめでたいことであったが、それでも新年のあいさつ回りはせず、松飾などは勿論、餅つきをする家も稀であった。大家すじでは神を祭る程度で、ご祝儀も餅つきくらいであった。さて小さな家に起居する人は、暦もなく、特に寒さが厳しくても、年が明けたのを知らず、去年の春を思っては挙首を疾しめ、額を集めてため息をつく他なかった。早くも春も半ばになり、日々暖かさが増し、清々しくなった。しかしながら、花は咲いても、宴会もなく、桃が美しく咲いても、節句の祭りもなく、蝶と遊びたわむれ、飛び交うのを見ても、これを羨むだけで、黄色い鳥が岡の隅に止まったのを見ても、自分には家がないことを嘆き、むなしく数日を送っていた頃、五月雨が降り、蟹や毛虫、蛙、その他の虫類が小屋の中へ見舞いに入ってきて大いに困った。その頃、広村も濱口大人の御世話によって長屋を建てて、しだいにこれに入っていった。また湯浅あたりへ行く者もあり、あるいは立ち退く者もあり、散り散りに去っていった。(つづく)